

早雲だより

2022.4.10
第154号
歴史グループ早雲
代表 井上一夫

第一七〇回 歴史ハイキング 報告

城陽市の歴史散策（古代編）

2022年3月27日（日）

前日の雨もすっかり上がりハイキング日和となりました。参加者は23名になりました。私は欠席したため報告は簡略とさせていただきます。

● 概要

奈良の都「平城京」から五里（約20km）、京の都「平安京」から五里（約20km）と二つの都の中間に位置する城陽市を表す「五里五里の里」の遺跡を散策しました。

城陽市付近は古代から重要な地域であったようで繰り返した土地が利用されていたようです。古墳・廃寺跡・官衙跡などが狭い地域にあって多くが史跡などに指定され、発掘調査により貴重な品々が多数出土しています。

古墳時代（3世紀）から奈良時代（8世紀）の期間の古墳から寺院への移り変わりなど時代背景に触れられたと思います。

今回は城陽市歴史民俗資料館様のお取り計らいで、学芸員様による展示品の解説と久世小学校内の古墳の見学が実現したことを報告します。誠にありがとうございました。

歴史ハイキングの案内を急な変更に対応していただいたスタッフの皆様感謝申し上げます。

参加者の皆様のご協力が無事終了できてホッとしています。ありがとうございます。

一口感想

Y・O

お天気に恵まれたハイキングでした。城陽市歴史民俗資料館では、芝ヶ原古墳の出土品、銅釧や四獣形鏡などの説明を受けることができました。しプリ力ではなく本物が見られたのは事前に申し込んでくださった世話人の皆様のお陰です。ありがとうございます。古墳めぐりも楽しかったです。

残念なのは井上会長が体調不良で欠席だったことです。早くお元気になりますように。会長に代わって先導、説明してくださいました。皆さんの感謝です。ありがとうございます。

◇◇◇◇◇

H・M

本番前日の日本列島を襲った大荒れで心配しておりましたが、当日は嘘のよ

うに晴れ渡り、快適なハイキングを期待させました。

午前中は城陽市歴史民俗資料館での学芸員の詳しい古墳の説明としプリ力でない本物の埋蔵物、四獣鏡・銅釧・勾玉など見ることができ感激。

昼食後、久世小学校内の古墳へ山城地域最大の前方後円墳等々回ったが城陽市内での古墳の多さには感服。

汗ばみ上着を脱ぎたくなるくらいの陽気となり、素晴らしいハイキングとなりました。

残念なことに会長の体調異変での欠席というハイキングもありましたが、

井之内さん・入江さんのリードで無事に完遂することが出来ました。

● 散策コース

近鉄京都線寺田駅～城陽市
歴史民俗資料館（文化ハル
ク内）～JR城陽駅～久世
廃寺跡（昼食）～鷲坂山（万
葉集歌碑）～久世小学校古
墳～正道官衙遺跡～芝ヶ原
古墳丸塚古墳～平川廃寺跡
～久津川車塚古墳～芭蕉塚
古墳～近鉄京都線久津川駅

（ ）の中に正解の動物
名を入れてください。

問題2

天狗の宴（天狗の酒盛）は愛
宕念仏寺で行われます。さて、
天狗といえば、鞍馬には牛若
丸に剣術を教えたという僧正
防という大天狗がいました。
お隣の比良山には次郎坊とい
う大天狗が有名です。それ
は愛宕山には何という大天狗
がいたでしょうか？

◆井内講座◆

問題1

京都にちなんだ妖怪からの
クイズ
ヒョーヒョーと気味の悪い
声で鳴き、横溝正史の「悪
霊島」では「鵜の鳴く夜は
恐ろしい」のフレーズで有
名です。その鵜からの問題
です。さて、鵜が登場する
平家物語では、鵜の姿は
（ ）の顔、（ ）
の胴体、（ ）の手足を
持ち、尾は（ ）であ
る記述があります。

問題4

大江山の酒吞童子の一の子
分で、一条戻橋で渡辺綱（源
頼光の四天王の一人）に腕
を切り落とされた鬼は何と
いう名前でしょうか？

問題5

丑の刻参りとは、嫉妬心
にさいなまれた女性が白衣に
扮し、灯したローソクを突
き立てた鉄輪をかぶった姿
で、神社のご神木に憎い相
手に見立てたわら人形に釘
を打ち込むという日本に古
来より伝わる呪術の一種で
す。京都では貴船神社が有
名です。それでは丑の刻と
は何時から何時まででしょ
うか？

問題6

大太郎法師？どう読みます
か？
また大太郎法師の反対の法
師とは何と言つてしょう。
大太郎法師（ ）
反対の法師（ ）

【編集後記】

今回のハイキングを直前
に欠席しましたことをお詫
び申し上げます。

幸いなことに予定してい
た企画が無事終了したこと
は誠にありがたいことです。
スタッフの皆様、参加者の
皆様ありがとうございました。

◇◇◇◇

普段はあまり検温をした
ことが無いのに、ハイキン
グ当日の朝にいくぶんのだ
るさを感じたので念のため
熱をはかってみました。3
6・9度でした。微妙。そ
の後はおると37・4度な
ど毎回37度越えました。
とりあえず資料を集合場所
まで持って行くことにして、
それまでに下がれば参加し
ようと体温計を持って家を
でました。駅で乗車直前に
検温しました。駅のホーム
で体温計を脇に挟む変なお
っさんに見えたと思います。

結果、私の願いは叶わず。

37・4度でした。微妙な
発熱ですが今回の参加を断
念しました。

発熱は夕方まで続きまし
た。寝るころには平熱に戻
っております。

翌日からは平常通りに過
ごしております。

ご心配をおかけして申し
訳ありませんでした。
皆様もご自愛ください。

◆井内講座◆解答

問題1

（サル）（タヌキ）（虎）
（へび）

問題2

太郎坊

問題3

安倍晴明

問題4

茨木童子

問題5

午前一時～三時

問題6

（だいだらぼっち）
（一寸法師）

(解説)

重文 久世神社本殿

丹塗りの一間社流造、檜皮葺で、柱上部・組み物・庇水引虹梁・庇曇股などを極彩色に仕上げています。内部は内陣と外陣に分かれ、内陣正面には幣軸付板扉、外陣正面に引違の格子戸四枚たてています。内陣の板扉には扉二枚にわたり大きな絵を描き、左右の脇羽目板にも草花を描いています。内陣正面の欄干中央に巴紋、左右に六弁の花紋を飾っています。外陣正面には透彫り欄干をいれ、単純化した唐草文様を柱間一間分にわたって彫刻した中に、中央に菊、左右に各2個ずつ計4個の桐を配しています。建立年代は明らかではありませんが、室町時代中期とされています。

国指定史跡 久世廃寺跡

久世廃寺は、塔を東、金堂を西に置く法起寺式伽藍配置をとります。寺域は東西約120m、南北約135mと推定されており、寺跡の大半は久世神社の境内地となっています。境内には塔跡・金堂跡・講堂跡が、土壇として残っています。

塔跡は、東西13・7m、南北13・4mの瓦積基壇と推定されます。金堂跡は、東西26・7m、南北21・3m瓦積基壇です。講堂跡は、東西23・5m、南北13mの瓦積基壇で、基壇上には7間(21m)×4間(10・5m)の四面庇をもつ建物があったことが確認されています。南門跡は、南北4・3m、東西8m以上の基底部が確認されています。南門跡北側の瓦溜まりからは、像高6・9cm(頭頂〜足裏)の金銅造の誕生釈迦仏立像が出土しています。

また東側の市道沿いでは、補修用瓦を焼いたと考えられる瓦窯跡がみつかっています。

発掘調査により、奈良時代前期に創建され、8世紀中頃に建物が整備され、11世紀前半に廃絶したと考えられています。

寺域北東側の丘陵部には、6世紀に築造されたと考えられている芝ヶ原1〜7号墳(前方後円墳2基、円墳5基)があります。

芝ヶ原遺跡

芝ヶ原遺跡は、東から西に延びる芝ヶ原丘陵に広がる遺跡です。

これまでの発掘調査で、古墳時代後半から飛鳥時代の集落跡や古墳時代中ごろの古墳などがみつかっています。また遺跡範囲内には芝ヶ原古墳群や久世廃寺があります。

集落跡からは、竪穴住居と掘立柱建物があわせて約

200棟みつかっており、大規模な集落であったことがわかっています。竪穴住居は、一辺が2〜6mあり、ほとんどがカマドをもっています。竪穴住居は、出土

遺物から古墳時代後期(6世紀後半)〜飛鳥時代初め(7世紀初め)に営まれたものと考えられます。

掘立柱建物は、8・3m×3・8m(5間×2間)のものが最も大きく、また倉庫と考えられる建物も4棟みつかっています。掘立柱建物は、出土遺物から古墳時代末(6世紀末)〜飛鳥時代末(7世紀末)のものと考えられます。芝ヶ原遺跡の集落では、竪穴住居から掘立柱建物へ徐々に変化していった様子が確認でき、当時の住居の移り変わりを

知ることができます。古墳は小規模な方墳で、古墳時代中期(5世紀)の大形円墳である芝ヶ原10・11号墳の南側に隣接

して5基みつかっています。規模は、一辺が7・5〜16mあり、幅1〜2mの周濠がめぐります。墳丘や埋葬施設は、削られてしまっているかもしれません。

周濠から出土した埴輪から、古墳時代中期後半(5世紀後半)の築造と考えられます。この他に、埴輪を転用した埴輪棺(埴輪を使った棺桶)も5基みつかっています。

また、約2万年前の旧石器時代の石器が3点(船底形石器1点とナイフ形石器2点)出土しており、城陽市内で最も古い人々の営みを示す資料です。

鷲坂

(白鳥飛来伝承地)

古事記や日本書紀の神話の世界では、日本建国神話の英雄である日本武尊が登場しますが、実はこの人物が城陽の久世神社の祭神となっています。ヤマトタケ

ルノミコトは父（12代景行天皇）の命令により九州の熊襲を討ち、東国の蝦夷を平定したのち、病状が悪化して伊勢国の能煩野

（のぼの）でこの世を去ります。死後、大きな白い鳥となって飛び去ったと伝えられています。「大和本紀」には「日本武尊白鳥となりて西方を指して飛び去らせ給ひぬ、又その鳥の行き落ちたりし山を鷺坂と申して山背の国に之有り」と傳承しています。能煩野からちよつと真西にあたるのがこの城陽市であり、久世神社に白い鳥が飛来して祭神となったようです。

「山背の久世の鷺坂神代より 春は張りつつ秋は散りけり」（万葉集・巻9・1707） 柿本人麿

正道官衙遺跡

1905年（昭和40年）、台地西端の池畔で瓦片や土

器片が見つかり、古代寺院があったと推定され、当初は地名をとって「正道廃寺跡」と名付けられた。1973年（昭和48年）2月からの大規模な発掘調査で寺院跡とみるより奈良時代の郡衙（役所）中心部分と推定される掘立柱建物群跡が見つかり、1974年（昭和49年）には「正道遺跡」（しょうじょういせき）と改名された。その後、付近では部分的な発掘調査を続けた結果、遺跡西側にも建物群跡のあることが分かっている。

この遺跡は、5世紀の小規模な古墳と、6世紀後半から7世紀にかけての集落遺構、そして7世紀以降の整然と配置された大型の掘立柱建物群からなる官衙遺構などが重なりあつて複合遺跡となっている。特に、官衙遺構は、歴史・地理的背景や出土遺物などから奈良時代の山城国久世郡の郡衙中心部であると推定される。1974年（昭和49年）9

月12日に城陽市では最初に国の史跡に指定され、翌年3月に史跡地全体の約10850平方メートルが公有化された。

この遺跡は、発掘調査後、埋め戻されて長い間広場になっていた。その後、遺跡の保存と活用を図りながら積極的にまちづくりに生かしていくという機運が高まり、1989年（平成元年）2月に文化庁の指導を得てこの遺跡を含む城陽市内全5か所の史跡整備構想が策定された。そして、翌年にはこの官衙遺跡の整備基本計画が作られ、1991年（平成3年）10月から整備工事が着工され、1992年（平成4年）11月に工事が完成し、史跡公園として遺構の一部が復元され芝生や万葉植物を配した広場として整備されている。

芝ヶ原古墳と

前方後方墳

前方後方墳は、弥生時代末に濃尾平野に現れた突出部をつけた墳丘臺が、古墳時代に突出部をより大きな前方部へと発達させて生まれた墳形です。古墳時代前期を中心に全国で約二百数十基が確認され、東日本で数多く築造されますが、西日本にもおよんでいます。

芝ヶ原古墳は、前方部の形状が不明ですが、まだ未発達で短く、前端に向けて開いていることから、初現的な前方後方墳と考えられます。

京都府南部では、西山1号墳（城陽市）、元稻荷古墳（向日市）、茶臼山古墳（八幡市）、大任重塚古墳・大任南塚古墳（京田辺市）など、古墳時代前期の前方後方墳が数多く知られています。

久津川古墳群と

芝ヶ原古墳

宇治市南部から城陽市北半の丘陵や扇状地には100基以上の古墳が分布しており、とくに大谷川扇状地や周辺の丘陵には多くの古墳が築造されています。これを久津川古墳群と呼んでおり、京都府内で最大規模の古墳群です。芝ヶ原古墳をはじめ、古墳時代前期から後期にかけて（3〜6世紀）、前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳など、さまざまな形や規模の古墳が築造され、有力者集団の本拠地であったことがわかります。とくに5世紀前半の久津川車塚古墳は山城地域最大の前方後円墳です。この地域は、奈良時代に久世廃寺や平川廃寺などが建立され、また郡衙（正道官衙遺跡）が置かれるなど、南山城地域の中核であり続けました。

芝ヶ原古墳は、久津川古墳群の中心部である大谷川扇状地を見下ろす丘陵上に位置しており、久津川古墳群の出現を考える上で重要な古墳といえます。

芝ヶ原古墳の出土品

墓坑上面 庄内式土器(1) 重口縁甕、高坏(1) 木棺内 銅釧(2個)、四獣形鏡(1面)、硬玉製管玉(187個)、ガラス製小玉(1300個以上)、

鉋(1本)、錐(8片) 銅釧は、目輪を模した青銅製の腕輪で、全国的にも数少なく、また本例のような形態は他に例がない貴重なものです。径は12・1cmあります。

四獣形鏡は、4匹の獣が配置された鏡で、中国の鏡を模した日本の鏡として初期のものと考えられます。径は12cmあります。

庄内式土器は、弥生時代から古墳時代へ移り変わる時期に作られた土器です。文様で飾った、古墳に置くために作られたものです。

史跡 芝ヶ原古墳

芝ヶ原古墳は、大谷川扇状地を見下ろす標高500～520mの丘陵北縁部に立地します。墳形は南に前方部がつく前方後方形で、後方は東西19m×南北21mあります。前方部は調査前に大部分が壊されていたため全体の形はわかりませんが、前端部が開いた比較的短い形をしていたと推定されます。後方の東側には、墳丘を丘陵から切り離すための溝が掘られています。この溝は後方部中央の東側で狭くなっており、丘陵側が半島状に掘残されています。

埋葬施設は、後方部中心に設けられた墓坑の中に、長さ3m、幅0・7mの組合式木棺を納めるものでした。墓坑の上部には礫が敷かれ、その

上に葺や高坏などの土器が置かれていました。埋葬後に行われた祭祀に伴うものと考えられます。副葬品は、銅釧、四獣形鏡、勾玉、管玉、ガラス製小玉が木棺内の北端に置かれており、被葬者の体に直接つけるのではなく、被葬者の頭部周辺にまとめられていたようです。これは一部副葬品の南側で、鉄製の鉋(やりかん)な、錐が出土しています。

出土した土器から3世紀前半に築造されたと考えられ、古墳が造られるようになる古墳時代でも初期の墳墓として重要な資料となっています。

国指定史跡 丸塚古墳

丸塚古墳は、前方部が低く短い帆立貝形の前方後円墳で、周囲には周濠がめぐります。墳丘の長さは80mで、周濠を含めた全長は104mあります。後円部の直径は63mあり、高さ

は東側で8・3m、西側で9・6mあります。後円部は二段に築かれていると考えられており、墳丘斜面には葺石が施され、一段目平坦面には埴輪列がめぐっています。前方部の長さは17mあり、幅は前端で32m、クワ部で20・5mあり、高さは約23mあります。前方部は一段に築かれ、墳丘斜面には葺石が施されています。周濠は墳丘と相似形で幅が16mあります。

また、周濠の上縁から1・8m外側には約6・6m感覚で円筒埴輪が据えられています。この埴輪列により、古墳の範囲(墓域)を区画していると考えられます。

埋葬施設については、未調査のため明らかではありません。

墳丘からは、円筒埴輪・朝顔形埴輪や形象埴輪が出土しています。形象埴輪は据えられた状態でみつかったものはありませんが、家

形埴輪、蓋(きぬがさ)形埴輪、甲冑形埴輪が出土しています。特に、家形埴輪は、五棟以上の破片が出土しています。このうちの1棟は大型の入母屋造の家形埴輪で、桁行が約720cm、梁行が約600cm、高さが約1mあります。

史跡「平川廃寺跡」

平川廃寺は、1943(昭和18)年頃、瓦が出土することから寺院跡として注目されはじめました。その後、1966(昭和41)年に行われた発掘調査で、建物の瓦積基壇が発見されました。1972(昭和47)年から1974(昭和49)年の調査では、塔と金堂の瓦積基壇がみつかるとともにこれらの建物を取り囲む回廊、寺域を区画する築地も確認されました。1

975(昭和50)年には、南山城地域の奈良時代を代表する寺院として、国指定史跡となりました。

伽藍配置は、西に塔、東に金堂を配置する法隆寺式と考えられていますが、講堂や中門は確認されていません。塔・金堂を囲む回廊は東西約81m、南北約72m、寺域は東西約175m、南北約115mと推定されています。寺域西側に塔や金堂の中心建物、東西に付属建物を配置しています。塔の瓦積基壇は一辺17.2mあり、国分寺の塔に匹敵する大きな規模をもっています。金堂の瓦積基壇は、東西22.5m、南北17.2mありました。

出土した瓦から、創建は奈良時代中ごろ(8世紀中ごろ)で、奈良時代末から平安時代初め(8世紀末)に修理が行われています。しかし、修理後まもなく塔と金堂は火災により焼失し、

その後再建されることなく地上から姿を消してしまったようです。

また、西側築地の外側で、接するように赤塚古墳がみつかりました。すでに墳丘のほとんどもを削られていたが、南側に造り出しをもつ直径約22.5mの円墳で、使用された埴輪から5世紀後半の築造と考えられます。

国指定史跡

久津川車塚古墳

久津川車塚古墳は、墳丘の長さが約一八〇メートルで、周濠を含めた全長は約二七二メートルあります。南山城地域では、最大の前方後円墳です。

久津川車塚古墳は、大谷川により形成された扇状地のほぼ中央に築造されています。大谷川の扇状地には、古くから「七ツ塚」と呼ばれる七基の古墳があり、久津川車塚古墳、梶塚古墳、芭蕉塚古墳、青塚古墳、箱塚古墳、指月塚

古墳、丸塚古墳がそれにあたります。

現在は、国指定史跡の久津川車塚古墳と丸塚古墳、城陽市指定文化財の芭蕉塚古墳の他に、青塚古墳の一部が現存しています。

久津川古墳群は、宇治市南部の広野地域、大谷川扇状地を中心とした平川地域、城陽市の中央部にあたる富野地域の三グループに分けることができます。特に三基の大型前方後円墳(久津川車塚古墳、芭蕉塚古墳、丸塚古墳)が所在する平川地域は、久津川古墳群の中心となっています。

国指定史跡

芭蕉塚古墳

芭蕉塚古墳は、一段に築かれた前方後円墳で、周囲には周濠がめぐります。墳丘の東西両側には、造り出しがあります。墳丘の長さは一四メートルで、周濠を含めた全長は一六一メー

トルあります。後円部の直径は六二・七メートル、前方部の長さは五一・五メートル、前方部端部の幅が六一メートルあります。墳丘一段目は開鑿などにより削られており、本来の墳丘の高さはわかりませんが、約一〇メートルと推定されます。周濠の幅は、一一・四〜一五・五メートルあります。

規模な盗掘をつけており、盗掘坑から鉄製の甲冑片や形象埴輪片が出土しました。鉄製の甲冑片は副葬品の一部と考えられ、形象埴輪片は墳頂部に並べられていたものと考えられています。

埴輪は、円筒埴輪・朝顔形埴輪・壺形埴輪・形象埴輪が出土しています。形象埴輪は、家形埴輪・蓋形埴輪・鞍形埴輪・盾形埴輪・甲冑形埴輪・円形埴輪があります。特に円形埴輪は、東側くびれ部の墳丘裾部に据えられた状態で出土しました。底部が残っていたにすぎませんが、長さが約六四センチ、幅が約四四センチ、残存する高さが約二センチあります。

出土した埴輪から、五世紀中ごろに築造されたと考えられます。